

823-826)と、大唾液腺と小唾液腺という違いはあるものの、一致していた。

【結語】今回対象とした、口蓋の多形性腺腫と筋上皮腫では、CT及びMRIでの鑑別は困難であった。その一因として、生検による修飾が示唆された。しかし、多形低悪性度腺癌とは、T2強調画像の相違で、鑑別可能な場合があると思われた。

2 口腔癌の頸部郭清術後に出現した結節状構造の画像所見

林 孝文・田中 礼・小山 純市
平 周三・勝良 剛詞・益子 典子
西山 秀昌

新潟大学大学院医歯学総合研究科
顎顔面放射線学分野

口腔癌の頸部郭清術後の経過観察CT・USにおいて、しばしば頸部に結節状構造の出現をみることがあり、neoplasmと誤診する可能性がある。本演題では、頸部郭清術後少なくとも半年以上経過しmalignancyが否定的と判断しうる症例における代表例を供覧する。

〔症例1〕42歳・女性。臨床診断：右側舌腫瘍(T2N0)。舌右側半側切除術・右側選択的頸部郭清術施行。経過観察USにて右側オトガイ下部に紡錘形の結節状構造が認められ、内部は不均一な低エコーであった。画像上、肥厚性瘢痕の可能性が高いと考えられた。

〔症例2〕43歳・男性。臨床診断：右側舌腫瘍(T4N0)。舌右側半側切除術・右側選択的頸部郭清術施行。経過観察USにて左側頸動脈分岐部上方で内頸動脈後縁に沿って、上下に長い下端が盲端となった結節状構造が認められた。頸部郭清術後の切断神経腫として報告されているものと画像上類似していた。

3 MRIが有用であったじん肺に合併した肺癌の1例

奥泉 美奈・酒井 邦夫・森山 裕之*
高橋 正明*・井上 政昭**
能勢 直弘**・川口 誠***

新潟労災病院放射線科
同 呼吸器内科*
同 呼吸器外科**
同 検査科病理***

症例は73歳の男性で、42歳からじん肺健康管理区分管理3.口と決定されていた。

平成15年のじん肺健診で喀痰細胞診class V, 単純写真上、左下肺の腫瘤影の増大を指摘された。胸部CT上、両肺に結節影が多発しみられた。MRIでは、じん肺結節部はT1, T2強調像で低信号を呈するのに対し、腫瘍部はT2WIで高信号を呈していた。左下葉切除が施行され、扁平上皮癌の結果であった。MRIはじん肺結節部と腫瘍との鑑別に有用であった。

4 上腸間膜動脈解離：5例の検討

堀 祐郎・内山 早苗・奥泉 譲
伊藤 猛・西原真美子・吉村 宣彦*
長岡赤十字病院放射線科
新潟大学医歯学総合病院放射線科*

【はじめに】孤立性の上腸間膜動脈解離は稀であり、経過や予後については未だ不明である。文献的には、外科的治療にて救命し得たというものが多く、保存的に経過観察し得たというものは少ない。今回我々は、孤立性の上腸間膜動脈解離5例を経験し、そのCT所見の経時的変化を検討したので報告した。

【対象・患者背景】CTにて確定診断した発症時期が明らかな孤立性の上腸間膜動脈解離5例(うちCTで経過観察できたのは4例)。年齢39~62才(平均52.4才)。全例男性。CTによる観察期間：18~1330日(平均555.6日)。

【結果】全例保存的に経過観察し得た。外膜濃染および血管周囲脂肪濃度上昇は、発症早期にのみ認められた。全例で偽腔の経時的縮小と真腔の経

時的拡大が認められた。

【結論】孤立性の上腸間膜動脈解離は経過観察により偽腔の自然縮小を認めることも多く、症例を選べば保存的に経過観察が可能と考えられた。

5 脳血管障害救急医療での 24 時間 MRI 体制の有用性

金沢 勉・笠原 哲郎・岩崎 友也
阿部 猛・小黒 賢二・奥泉 美奈
松本 大樹*・鬼頭 知宏*
柿沼 健一*・江塚 勇*

新潟労災病院放射線科
同 脳神経外科*

近年、MRI の撮影技術の進歩により可能となった拡散強調画像 (DWI) は、脳血管障害超急性期の概念を大きく変えた。新潟労災病院では、この流れにいち早く対応するために MRI 24 時間稼働という全国でも希な救急体制を 2001 年 11 月より構築し良好な治療成績をあげている。今回、MRI 24 時間体制構築の為の問題点と、脳塞栓症に対して迅速な診断のために、CT を撮らずに MRI を第一選択としていることにおける問題点を検討し、稼働実績や臨床上の有用性を示す。

24 時間体制の問題点としては、当院では待機制度をひいているため放射線技師全員の操作トレーニングが必要であったが、脳塞栓に絞った撮像シーケンスを作成し半年間で行えた。時間外診療では重症患者が多く、情報量が少ない中で MRI 絶対禁忌など安全面の配慮を確実に行わなければならない。そのため簡易マニュアルや詳細マニュアルを作成し、さらに RIS の患者データを有効利用し事故のない検査を行っている。MRI を第一選択することでの問題点は、脳内の小出血に対する感度の低下が考えられたが、FLAIR を付加することで問題を解決した。FLAIR は TR と TI の関係が把握されていれば、脳脊髄液の信号を確実に抑えることが可能で、微量なくも膜下出血等は CT よりも描出に優れている。

脳塞栓疑いでは、DWI によって超急性期の脳梗塞を描出し、血栓溶解術による血行再建につな

げている。当院では、最終的には DWI により超急性期血行再建術の適応が決定されているので、24 時間 MRI 稼働は重要な体制である。稼働実績としては、MRI の時間外の件数は、脳神経外科の全体の 8.1 % を占め、予約外は診療時間内も含めると 30.7 % に達し、救急患者に随時対応している結果と考える。実際、時間外では来院から MRI までの流れで初期治療を含めて平均 52 分で診断まで対応できており、発症時から血栓溶解術開始までは平均 240 分で対応している。治療成績は中大脳動脈の閉塞がもっとも治療効果がよく、また血栓溶解術を行わなかった群では社会復帰率が 0 % であったものが、血栓溶解術を行った群では 50 % となり、保存的療法では予後が悪く血栓溶解術の有用性が確立されている。これらの体制を背景に、新潟労災では超急性期血行再建による脳蘇生を積極的に行っているが、MRI の DWI を初めとする特徴的なシーケンスは非常に重要な役割をはたしており、MRI 24 時間稼働は絶対条件である。

6 0.3T オープン MRI による拡散強調画像とテンソル解析の試み

関 耕治・岡村 健義*・元井 玲子**
MRI 診断ネット・三島病院
萌気園二日町診療所 MR 室*
小千谷さくら病院 MR 室**

【目的】0.3 テスラ MR 機による拡散強調画像の最適化を行い、テンソル解析が可能か検討した。

【方法】日立オープン MR 機 (AIRIS-II) にて EPI による拡散強調画像のパラメーターを種々変更し、画質と時間の妥協点を探った。

【結果】16 ショット EPI で、128 * 128 マトリックス、7mm (gap 1)、2 NSA にて 3 分以内で良好な画質が得られた。テンソル用には 3 方向 MPG 画像および b 値 = 0s/mm² の 4 シリーズを 10 分以内に苦痛なく撮影可能であった。それらから良好な ADCmap が得られ、Dr. View (旭化成) にてカラーマップ (3DAC) を作成でき、神経線維方向を明示できた。あわせて 2 例の症例を提示